

薬物乱用の現状と防止に向けた取り組み

谷川 尚己¹⁾

The Current Situation of Drug Abuse and Match for Prevention

Naomi TANIGAWA

Key words : Gateway drug, Dangerous drug, Preventive education

キーワード：薬物の入り口，危険ドラッグ，防止教育

1 はじめに

「1 大麻，2 MDMA，3 覚醒剤，4 シンナー，5 タバコ，6 お酒，7 カゼぐすり」。この中で薬物は？実は、「全部なのです」タバコやお酒も薬物で，特に，大麻や覚醒剤，危険ドラッグの入り口 (Gateway drug) と言われている。薬物とは、「依存の状態及び幻覚をもたらし，又は運動機能，思考，行動，知覚もしくは感情に障害を起こす中枢神経系の興奮又は抑制をきたすもの」と定義づけられている。そして，社会のルールからはずれた方法や目的で使用すること，すなわち，薬物を正しくない使い方をすることが問題であって，1 回の使用でも乱用と言うのである。したがって，タバコもお酒も，その使い方によってはカゼぐすりまでもが「薬物」となるのである。

その薬物が，若者の間に着実に侵入しつつある。その危険性について，現状を正確に把握し，対策を立てることが急務だと考える。

2 薬物乱用の恐ろしさ

「一度の好奇心から始まる一生の闘い」小さな好奇心や仲間意識から始めた「乱用」は，やがて，「渴望」を伴ってくる。ある種の快感や高揚感を伴う行為を繰り返し行った結果，それらの刺激なしにはいられない状態に

なってしまうのである。「依存」が形成されるのである。薬物に支配され，頭の中は薬物のことでいっぱいになり，他のことが考えられなくなっていく。さらに，同じ量ではもう効かなくなり，「耐性」ができてしまう。次には，幻覚や妄想。体も心も薬物に支配されてしまうと，病院へ行ってもなかなか回復しないのである。ストレスや飲酒などで，また，薬物へ，フラッシュバックが起こるのである。

3 危険ドラッグの現状と対策

危険ドラッグによる事件や事故が多発している。その危険ドラッグ乱用者の多くは，若い男性である。ところで，危険ドラッグはどのようにして作られているのだろうか。ポリバケツに乾燥させた植物片と化学物質を混ぜ合わせ，適当にパックに入れていくのである。1つ目のポリバケツが空になると，2つ目のポリバケツも同様に混ぜ合わせるのだ。したがって，1つ目のポリバケツと2つ目のポリバケツの中身は作っている者でさえ分からないし，どんな反応をするのかも全く分からないのである。

1) スポーツ学部

表1 危険ドラッグの成分とその性質

成分	テトラヒドロカンナビノイド	カチノン
成分の由来	大麻類似物質	覚醒剤類似物質
分類	ダウンナー	アップナー
精神薬理作用	大麻の5~20倍	覚醒剤の数倍
依存性	身体依存が強い	精神依存が強い

今までの薬物といえば、その行動等が予測できたのである。覚醒剤は、対人・対物暴力や興奮錯乱といったアップナー系の特徴。大麻は、意識障害といったダウンナー系の特徴。ところが、危険ドラッグはその両面を持ち合わせているのである。(表1)また、依存性のある人は、「手に入れやすい」「安価である」ため、捕まるかどうかは気にせず購入するというのである。それよりも、「意識がなくなる」「効果が違うことを期待している」というから、なおさら恐ろしいことである。薬事法改正、包括指定、販売者への監視指導強化策等の防止対策が取られ、危険ドラッグの店舗は徐々に減少している。しかし、「捕まる薬物」と「捕まらない薬物」のいたちごっこが続いているのである。法による取り締まりには限界があり、そこで、教育の重要性が再確認されている。個人の健康、人生をダメにする、家族・友人・知人をダメにする、社会をダメにすることのないよう正しい知識を知り、考えることによって、薬物依存を防止しようとするものである。

4 大学教育としての取り組み

本学は、教員免許を取得するする学生が多

くいる。そこで、志賀中学校区と連携し、校区の先生方に理解していただくことはもちろん、学生達もともに学習することができないかと考えた。校区での保・幼・小・中学校の先生方への講演、さらには、学生による中学校7学級での授業を实践する機会を得た。学生たちは、授業を行うにあたり、それぞれに工夫をした。また、警察官の生々しい講話を聴いたり、学校薬剤師の助言を受け、授業を实践することができた。



次に行ったのは、「薬物乱用防止サークル」の起ち上げである。薬物乱用防止に向けた学習会を行い、近隣の小学校や中学校での授業、地域住民へも働きかけたのである。2015.2.11には、草津警察署と連携し、「イオンモール草津」でのアピール活動を行った。(写真)多くの買い物客の方に知ってもらおうと呼び掛け、展示等も行ったのである。今後も県内でのアピール活動が続き、学生たちが自分たちの問題として捉え、学習し、訴えたことは、将来教員となったときには、必ず



や生かせるものと確信している。

5 まとめ

薬物乱用は、若者の中で広がりつつある。正しい知識や正確な情報をもとに、大人は教育の場や地域社会の中で、若者への啓発・教育はもちろん、小学生時代の早期から「自分の健康は自分で守る」といった力を身につけさせることが、薬物乱用の根絶につながるものと考ええる。

参考文献

- 1) 文部科学省：中学校学習指導要領解説 保健体育編，2008
- 2) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 保健体育編，2009
- 3) 日本学校保健会：喫煙，飲酒，薬物乱用防止に関する指導参考資料 小学校編2010
- 4) 日本学校保健会：喫煙，飲酒，薬物乱用防止に関する指導参考資料 中学校編2011
- 5) 日本学校保健会：喫煙，飲酒，薬物乱用防止に関する指導参考資料 高等学校編，2012